

令和 5 年 6 月 9 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2022

課題番号：16K04228

研究課題名（和文）大学における死生観教育プログラムの開発的研究

研究課題名（英文）Program evaluation of "Death Education" for University Students

研究代表者

藤井 美和 (Fujii, Miwa)

関西学院大学・人間福祉学部・教授

研究者番号：20330392

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の内容は、死生観教育の必要性についての議論、プログラム開発、プログラム変更とプログラムの実施、効果測定のための尺度作成と測定、効果測定の結果分析、分析結果からプログラムの妥当性と死生学教育への提言を行うものである。学生の死生観は、死観6因子、生観5因子から成り、死生学教育の前後で有意に変化のあったのは、死観5因子と生観1因子であり、男女（性自認）によっての違いがみられた。また、死について考えることへの肯定的な態度や、人生がどんなものであっても生き抜きたいという、生きることへの積極的な態度が有意に高くなったことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

最も大きな意義は、大学における死生観教育の効果を明らかにすることで、その必要性を示すことができたことである。具体的には、死生観教育の内容的に妥当性のあるフレームワークを提示できたこと、学生の死生観（生と死に対する考えや価値観）の構成概念を明らかにできたこと、効果測定によって、死生観教育が学生の死生観に影響を与え、さらに「死を考えること」や「生き抜くこと」への肯定的態度に有意な変化があったことが明らかになったことの3点である。本研究によって、今後の大学教育における死生観プログラムの積極的な展開に一つの根拠を提示することができたと考える。

研究成果の概要（英文）：Since modern society values people based on productivity and efficiency, not only the disabled and the elderly, but also young people are struggling with the value of their own existence. In order to find the meaning of one's life, it is crucial to think about death and life. Although "Death Education" has received attention, few universities offer the programs, and no research has been done on its content validity or its effectiveness. This study developed a death education program for university students and analyzed its effectiveness. The results showed that the program had a significant impact on students' views of life and death. In addition, paired t-test revealed that after the course, students became more positive about thinking about death and more willing to actively live their own lives.

研究分野：死生学

キーワード：死生観 Death Education プログラム開発 効果測定

## 1. 研究開始当初の背景

現代は、出生から死に至るまでのいのちの操作が可能となり、能力があり、社会貢献できる人間に価値を認める傾向は今後ますます強くなると考えられる。親や社会が望む子どもを産むこと(出生前診断による選択的人工妊娠中絶)や、家族や社会の重荷になるのであれば死を選ぶ(積極的安楽死)など、ありのままの人間や存在そのものに意味を見出すことが困難になってきている。老いや障害を語らず、死は避けられるべきものとされ、どこまでも健康でいることに多くの研究とエネルギーが注がれている。しかし人は、死があるが故に、いかに生きるかを考える存在である。死生観教育は、死を見ることによって人間がどのように生きるかを考えるきっかけを与えるものである。老いて、障害を持ち、いつか必ず死を迎える人間の存在価値はどこにあるのか、その根源的な問いに向き合うものである。

幼い時から競争社会を生きていた大学生が、死生観教育によっていのちの意味を考え、存在価値を見出していくことは、学生自身の人生においても、今後社会の一員として将来の社会的価値観を構築していくうえでも重要である。そのような背景から、死生観教育に関心が寄せられつつあるものの、日本の教育現場では定着しておらず、死生観教育プログラムが提供されている大学は極めて少ない。その理由は、実践されるプログラムが教員個人に任されており、システムティックなフレームワークや内容の妥当性が議論(実証)されていないこと、また教育プログラムが学生の死生観にどのような影響を与えているのか、その効果について検証されていないことにある。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、死生観教育として妥当性のあるプログラムを開発し実践すること、そしてその効果測定によって、死生観教育が学生にどのような変化をもたらすかを明らかにすることである。具体的計画は、死生観教育を必要とする社会のあり様を考察、大学教育における死生観教育プログラムを開発、プログラムを実施、プログラムの効果測定を行い、今後の死生観教育プログラム(死生学教育・Death Educationを含む教育)への枠組みの提案と死生観教育への提言を行うことである。

## 3. 研究の方法

- (1) 死生観教育について国内外の文献とプログラムの実績を調査し、プログラムの内容分析を行う。次に教育枠組みを構築し、必要な内容を大学の半期のカリキュラムに構成し、授業で実施する。プログラム開発は、『リサーチ - プログラム開発 - 効果測定 - プログラム改良』という一連の Research & Development (R&D) の手続きに従う。
- (2) プログラムの効果測定のための死生観尺度(質問紙)を作成。
- (3) 授業前後で行ったアンケートの分析から、死生観の下位概念を明らかにし、教育効果と下位概念の変化を分析し、さらに、学生の「生と死に対する態度」が受講前後でどのように変化したかを分析する。

## 4. 研究成果

### (1) 死生観教育プログラムの開発

妥当性のあるプログラム構成として最終的に選択したのは2方向からのアプローチである。1つは生と死を「レベル(ミクロ、メゾ、マクロ)」から見るアプローチ。もう1つは、生と死を「人称の視点(一人称、二人称、三人称)」から見るアプローチである。ミクロ、メゾ、マクロレベルのアプローチは、死について、死にゆく人本人、周りを含む環境、社会が死をとらえる視点(生命倫理)であり、人称の視点は、いのちの問題を当事者として語るか、親しいものとして語るか、社会の一員として語るかという立場の違いである。したがって、プログラムは、ミクロからマクロまでの問題に対して、1人称としてのワークショップ、2人称としての語り、3人称としての知識の獲得を目的に構成するものとなった。

- (2) 死生観尺度は、「死」についてたずねる33項目、「生」についてたずねる23項目、それらに加え、生と死に対する態度をたずねる7項目である。

### (3) 教育プログラムの効果測定

プログラム改変を経て、研究期間最終年度(2022年度)に開発した死生観教育プログラムを半期の授業期間内(死生学)で実施した。受講生は、私立大学9学部(神、文、社、法、経済、商、人間福祉、教育、国際)の2年生以上(履修基準年度2年生)と、協定している医科大学の医学部1年生である。教育効果の測定は、授業開始前と授業終了後に死生観を問うアンケートの分析によって行った。研究倫理の手続きに従い、書面と口頭でインフォームドコンセントを行った結果、研究に同意し参加した学生は107人(性自認男性34人、女性68人、回答しない5人)、平均年齢は20.32歳(SD=1.28)であった。以下、学生の死生観の下位概念を「死」と「生」に分けて報告する。そのために、死についての考えを「死観」、生についての考えを「生観」とする。

### 死生観の構成概念と受講後の変化

因子分析の結果、学生の死観は 19 項目 6 因子に収束した。たましいの不滅、死後の世界、新たな始まり等で構成される第 1 因子「魂の不滅」、怖い、苦しい、受け入れられない等の項目で構成される第 2 因子「恐れと苦しみ」、周りを悲しませる、大切な人との別れで構成される第 3 因子「別れと悲しみ」、生き方が表れる時、最後の成長の機会、意味あるもの等の項目で構成される第 4 因子「成長と意味」、この世の関係性の喪失と存在が忘れられるによって構成される第 5 因子「現世からの忘却」、そして第 6 因子「未知・漠然」であった。

1 人ひとりの教育効果を測定するため、対応のある t 検定によって受講前後の差を検定した。その結果、「魂の不滅」( $t=-1.70$ , n.s.) と「成長と意味」( $t=-4.10$ ,  $p<.001$ ) は受講後の方が高くなり、「恐れと苦しみ」( $t=1.99$ ,  $p=.004$ )「別れと悲しみ」( $t=1.99$ ,  $p=.049$ )「現世からの忘却」( $t=2.56$ ,  $p=.012$ )「未知・漠然」( $t=3.76$ ,  $p<.001$ ) は低下した。「魂の不滅」以外のすべての因子に受講前後で有意な差が見られた。

生観は、15 項目、5 因子構造であった。それらは、「成長と思考」、「義務と使命」、「生かされた者として意味を見出す」、「虚しさや孤独」、「死ぬまでの時間・身体機能」であった。対応のある t 検定の結果、受講前後で有意差が見られたのは、「虚しさや孤独」( $t=-2.136$ ,  $p=.018$ )のみであった。生きる虚しさや孤独は、受講後の方が有意に低下していた。

性自認の男女比較においては、男性は死観において、「恐れと苦しみ」( $t=2.83$ ,  $p=.008$ )「別れと悲しみ」( $t=3.03$ ,  $p=.005$ )「成長と意味」( $t=2.21$ ,  $p=.034$ )「現世からの忘却」( $t=2.33$ ,  $p=.026$ )「未知・漠然」( $t=4.03$ ,  $p<.001$ ) に受講前後に有意な差が見られたものの、女性において有意差が見られたのは、「成長と意味」( $t=3.45$ ,  $p=.001$ ) だけであった。生観においては、女性のみ「虚しさや孤独」( $t=2.12$ ,  $p=.039$ ) が有意に低下した。

### 生と死に対する態度

死生観教育の効果として質問項目について、対応のある t 検定によって受講前後で有意な差が見られたのは、「死について考えることは、よりよい生につながる」( $t=-2.85$ ,  $p=.005$ )、「死について考えることに意味がある」( $t=-2.26$ ,  $p=.026$ )、「どんな人生でも生き抜きたい」( $t=-2.04$ ,  $p=.044$ )であり、いずれも受講後の方が高くなっていた。

死生観教育の効果として、死生観の構成概念の変化だけでなく、死について考えることについての肯定的な態度や、人生がどんなものであっても生き抜きたいという、生きることへの積極的な態度が強くなったことが明らかとなった。

研究期間中に、西日本豪雨と新型コロナウイルス感染拡大により授業が中断され、研究期間の延長を繰り返したものの、プログラム改変に十分な時間が取れなかった。しかしながら今回のプログラム構成（生と死に対するレベルと人称のアプローチ）は、効果測定から見ても一定の妥当性のあるものであることが確認できた。

今後はプログラムの拡大（基本型と発展型）により、さらに学生一人一人が自身と他者の生と死、そして社会の生と死から、生きることの意味や生と死における社会の矛盾点を話し合うようなアクティブなプログラムに発展させていきたい。また教育現場における死生観教育を共有していくことの必要性も提示していきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 藤井美和	4. 巻 42(1)
2. 論文標題 「死ぬこと、生きること、働くこと：死を見つめることを通して働くことを考える」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中京企業研究	6. 最初と最後の頁 213-224
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤井美和	4. 巻 45(2)
2. 論文標題 死生学にみるグリーンワーク(特集 生と死の交互作用：グリーンワークとソーシャルワーク)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 精神療法	6. 最初と最後の頁 212-217
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藤井美和	4. 巻 11
2. 論文標題 ソーシャルワークとスピリチュアリテ - 死生学から見る人間理解 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ソーシャルワーク実践研究	6. 最初と最後の頁 2-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藤井美和	4. 巻 11(1)
2. 論文標題 社会福祉における価値 - いのちの視点から -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人間福祉学研究	6. 最初と最後の頁 43-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤井美和	4. 巻 27
2. 論文標題 「聴くこと」の意味	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 医療社会福祉研究	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤井美和	4. 巻 45 ( 2 )
2. 論文標題 死生学からみるグリーフワーク	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 精神医療	6. 最初と最後の頁 212-217
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤井美和	4. 巻 128
2. 論文標題 死生観にかかわる教育：ソーシャルワーク教育における課題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会福祉研究	6. 最初と最後の頁 58-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件（うち招待講演 19件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 藤井美和
2. 発表標題 スピリチュアリティ、スピリチュアルペイン、そして寄り添い
3. 学会等名 高齢多死社会日本におけるウェルビーイングとウェルディングの臨床社会学的研究研究会（北海道大学）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤井美和
2. 発表標題 寄り添いに求められるもの - 死生学の視点から -
3. 学会等名 神戸いのちの電話（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤井美和
2. 発表標題 第2回死生懇話会 ～「死」を捉えた「生」のあり方を考えるヒントに～
3. 学会等名 滋賀県総合企画部（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤井美和
2. 発表標題 「いのち」に向き合う - 死生学の視点から -
3. 学会等名 日本ホスピス緩和ケア協会中国支部大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤井美和
2. 発表標題 「いのち」に向き合う - 緩和ケアの原点 -
3. 学会等名 日本医療ソーシャルワーク協会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤井美和
2. 発表標題 人の苦しみと寄り添い
3. 学会等名 こころの救急箱（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤井美和
2. 発表標題 「いのち」へのまなざし～死生学の視点から～
3. 学会等名 第65回日本透析医学会学術集会・総会（基調講演）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤井美和
2. 発表標題 「死ぬこと、生きること、働くこと：死を見つめることを通して働くことを考える」
3. 学会等名 中京大学先端共同研究機構企業研究所 公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤井美和
2. 発表標題 第1回 死生懇話会 ～「死」を捉えた「生」のあり方を考えるヒントに～
3. 学会等名 滋賀県総合企画部（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤井美和
2. 発表標題 「いのちに向き合う - 緩和ケアの原点」
3. 学会等名 公益財団法人日本医療社会福祉協会（基調講演）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤井美和
2. 発表標題 「寄り添い」の本質 - 死生学の立場から -
3. 学会等名 日本音楽療法学会 第19回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤井美和
2. 発表標題 「聴くこと」の意味
3. 学会等名 第28回日本医療社会福祉学会大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤井美和
2. 発表標題 ソーシャルワークとQOL - 死生学の視点から -
3. 学会等名 北星学園福祉臨床学科公開講演会（招待講演）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤井美和
2. 発表標題 「生きづらさ」をつくっているのは何（誰）なのか？
3. 学会等名 滋賀県死生懇話会 死生懇話会委員によるリレートークイベント（第1弾）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤井美和
2. 発表標題 「いのち」へのまなざし - 当事者の声に聴く -
3. 学会等名 第34回日本生命倫理学会（学会講演）（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤井美和
2. 発表標題 「いのち」を考える - 死生学の立場から -
3. 学会等名 第7回近畿周産期精神保健研究会（基調講演）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藤井美和
2. 発表標題 第4回滋賀県死生懇話会 ～「死」を捉えた「生」のあり方を考えるヒントに～
3. 学会等名 滋賀県総合企画部（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藤井美和
2. 発表標題 「全人」への関わりとは - スピリチュアリティの視点から -
3. 学会等名 第13回総合福祉科学学会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藤井美和
2. 発表標題 第3回滋賀県死生懇話会 ～「死」を捉えた「生」のあり方を考えるヒントに～
3. 学会等名 滋賀県総合企画部（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関